

尾道市立日比崎小学校における外国語活動の実践報告

小野 章

(2012年10月2日受理)

A Report on Foreign Language Activities in Hibizaki Elementary School

Akira Ono

Abstract: Hibizaki Municipal Elementary School in Onomichi City had been experimentally involved in foreign language activities for six years between 2005 and 2010. The involvement was reported and examined in my paper included in the 2011 edition of this bulletin. This year (2012) I aim to report and examine the activities conducted in Hibizaki in 2011, the year when foreign language activities were formally introduced in every elementary school in Japan. In 2011 I visited Hibizaki six times in total and, as an advisor, attended foreign language activities-related classes. This paper focuses on the class I attended on 18 November 2011. The class was for the 6th grade (36 pupils), and taught by the HRT and an ALT from Australia. Here are 7 characteristic features of the activities conducted in the class: (1) The activities are, by being related to the other activities and subjects, are firmly integrated into the whole school curriculum; (2) Through items to be taught, the activities are connected with English taught as a subject at junior high school; (3) The goal of the whole unit, that of each class, and evaluation criteria are organically related to each other and explicitly shown in the class; (4) In listening activities the pupils naturally pay attention to what is being spoken. Tasks for listening are easy enough for them to handle; (5) Questions asked by the teachers are not answered by the teachers themselves. Instead, the pupils are encouraged to think hard to answer them; (6) The pupils have their intellectual curiosity stimulated; (7) In speaking activities, the pupils basically use expressions they have already become familiar with in the listening activities.

Key words : foreign language activities, elementary school

キーワード : 小学校外国語活動

1. はじめに

2011年度発行の本紀要『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』第60号において筆者は、尾道市立日比崎小学校で平成17～22年度に先行的に実施されてきた外国語活動を紹介した。その際、同校の外国語活動の特徴が、(1)到達目標、(2)年間計画、(3)『英語ノート』の活用方法、(4)聞くことと話すことへの工夫、の計4点にあると指摘した。この指摘は、平成17～22年度に筆者が助言者として観察した計6年分の学校全体の取り組みを振り

返ってなされたものである。(筆者は平均して1年に5回程度同小学校を訪問した。)

本論では、平成23年4月からの小学校外国語活動全面実施後の日比崎小学校の実践を取り上げたい。また、学校全体の取り組みではなく、それがひとつの授業にいかに関与されているかを分析したい。

分析対象の授業は、平成23年11月18日(金)に6年3組において実施された外国語活動(以下、6年3組外国語活動)である。授業者は6年3組担任の安保友理教諭とALTのErin Meade先生であり、授業を受けた児童は36名であった。計5時間から成る単元中、

本授業は第1時間目にあたるものであった。筆者は助言者として参加した。

6年3組外国語活動を振り返るにあたり、安保教諭が作成した指導案を引用しながら、以下、単元観と指導観（第2節）、目標と評価規準（第3節）、単元計画（第4節）、本時の指導案（第5節）の順番に分析を

えて行く。

2. 「単元観と指導観」から見えるもの

単元名は「夢を英語で語ろうーひびっこスピーチコンテストー」である。単元観と指導観は以下の通り。

単元観と指導観

本題材では、2学期末に実施する「ひびっこスピーチコンテスト」において、自分の夢や中学校でがんばりたいことなど、自分の思いをたくさんの人に伝えることをねらいとしている。スピーチは、学級のみならずではなく、ALTや中学校の先生、5年生にも聞いてもらい、審査する。そして、審査によって選ばれた代表児童は、学年全体や全校にスピーチする機会も設ける。伝える対象が学級の友達だけではなく、異学年や大人に及ぶことから、自分の思いがしっかりと伝わるように、相手意識をもち、話し方を工夫させることのできる題材である。この活動を通して、「相手の意見の根拠となることばに着目し、自分や相手の意見をまとめるために訊く」（「聞く」・「聴く」・「訊く」の3段階モデルより）ことは、相手の伝えたいことの大体を捉えながらきくという点で、コミュニケーション能力の育成につながっている。

（中略）

本題材のゴールとして、「ひびっこスピーチコンテスト」をきくこととする。学級の友達だけではなく、5年生やALT、中学校の先生を迎えて審査してもらおう。児童は、これまでに「修学旅行でインタビューしよう」で、修学旅行で外国人観光客にインタビューしたり、「スクールフラッグのアイデアを紹介しよう」では、友達に自分のアイデアを伝えたりする活動をした。今回、学級全体や他学年の前で英語でスピーチする活動は、初めてである。卒業を約3、4カ月後に控えた児童にとって、中学校でがんばりたいことや将来の夢について大勢の前で語ることは、自らを見つめなおすきっかけとなり、また自分の意志を伝える場となると同時に、今までに学習した表現を使い、伝え方を工夫できる題材であると考えている。この学習を受けて、将来の夢の実現に向け、3学期の総合的な学習の時間「12才のハローワーク」において、なりたい職業について仕事内容やなりたい職業に就くまでの過程を調べる学習も計画されている。

ねらいは、スピーチを通して自分の思いを伝えることであり、後述の単元計画から、最終的に児童は“Hello, everyone.” “My name is” “I want to be” “Thank you for listening.”といった表現に慣れ親しむことがわかる。コミュニケーションの場面としては、「特有の表現が良く使われる場面」中の「あいさつ」や「自己紹介」に当たろう。また、コミュニケーションの働きとしては、「考えや意図を伝える」表現や「相手との関係を円滑にする」表現が取り上げられている。「単元観と指導観」で着目すべき点としては、（1）外国語活動が単独で存在するのではなく、全教育課程の中にしっかりと位置付けられていること、（2）（1）に関連して、他教科等とのつながりを考えたものになっていること、（3）中学校との連携を意識したものになっていること、が挙げられる。これら3点を以下に詳述する。

2.1. 全教育課程の中の外国語活動

引用した「単元観と指導観」中の「聞く」・「聴く」・「訊く」という3つの「きく」力は、外国語活動のみ

ならず全教育課程を通じて育まれるべき能力として捉えられている。

平成24年1月20日開催の研究会の配布資料「平成23年度 尾道市立日比崎小・中学校教育研究会要項」159頁には、3つの「きく」についてそれぞれ次のような説明がある。

聞く（受け止める）：コミュニケーションのきっかけを掴もうと、相手の思いや考えを受け入れ、自分の考えをさしはさむことなく相手の話をきく。

聴く（構成する）：目的に合ったコミュニケーションを展開しようと、必要な情報を選び、自分の思いや考えを構成しながら相手の話をきく。

訊く（吟味する）：目的に応じたコミュニケーションの質を高めようと、自分の思いや考えを表現し、反応を引き出しながら相手の話をきく。

また、発達段階を考慮し、「聞く」力は低・中・高学年を通じて、「聴く」力は中・高学年で、「訊く」力

は高学年で育むこととしている。

上記3つの「きく」力は全教育課程を通じて育まれるべき能力として捉えられており、その評価規準には例えば「相づち（ええー、えっ、なるほど、それで、それから、どうしたの、はーっ、へーっ、ほーっ）を打ちながらいっている」といったものがある。このように、全教育課程を通じて育むべき能力を定めた上で、その能力育成に外国語活動も関連付けられているのだ。

2.2. 他教科等とのつながり

小学校学習指導要領には、外国語活動の「指導計画の作成と内容の取扱い」に関し、「指導内容や活動については、児童の興味・関心にあったものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること」とある。本単元で行うスピーチの題材は「自分の夢や中学校でがんばりたいこと」であるが、この題材は3学期に実施される総合的な学習の時間での題材「12才のハローワーク」と関連付けられている。

実際の授業を観察して残念に思ったのは、外国語活動の後に総合的な学習の時間が設定されていた点である。順番を逆にし、総合的な学習の時間で将来何になりたいのかをしっかりと考えさせた上で、外国語活動で将来の夢についてスピーチさせるべきであった。そうすることで児童は、自分の考えを他の人にも知って欲しい、それについてスピーチしたいという思いをより強めたのではあるまいか。実際の授業では、ややスピーチが「はじめにありき」になっていたと感じた。「小学校学習指導要領解説」にもあるように、「児童の自己表現したいという気持ち」を十分に高めた上で、外国語活動に従事させるべきである。

2.3. 中学校との連携

平成24年度から全面実施となった中学校学習指導要領は、「外国語科改訂の要点」として、「領域ごとに示す言語活動の指導事項を（中略）それぞれ1項目ずつ追加または再編成し、各5項目としている」点を挙げている。領域「話すこと」において新たに追加された指導事項は、「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」である。

中学校で新たに加えられた指導事項である「スピーチ」を6年3組外国語活動は取り入れている。ただし、これは中学校での活動を単に前倒しで行おうとするものでは決してない。あくまでも、「基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの素地を養う」

ための外国語活動としてのスピーチである。よって、スピーチで使用する表現も、そのほとんどがこれまでの外国語活動で既に慣れ親しんできたものである（本論第4節の「単元計画」における「使用表現」を参照）。

『中学校学習指導要領解説』では、スピーチが「与えられたテーマについて、自分の意見や主張を聞き手に対して分かりやすく話すという活動」であるとされている。また、中学生にスピーチを行わせる際、「絵や実物を示して聞き手の理解を容易にするなどの工夫をさせることも考えられる」ともある。このように、聞き手に対する分かり易さが中学校でのスピーチには求められている。6年3組外国語活動でも、スピーチにおいて「相手を惹きつけるための工夫」として、「声の調子の変化や具体物の提示」が挙げられている（本論第4節の「単元計画」を参照）。

「スピーチ」という中学校に新たに加えられた指導事項を通じて、6年3組外国語活動は中学校との連携を図っていると言えよう。

3. 「単元目標」と「単元の評価規準」から見えるもの

6年3組外国語活動の指導案に掲げられた単元目標は以下4点であった。

- 相手意識をもって、自分の考えや気持ちを意欲的に伝える。（関心・意欲・態度）
- 伝えたいことが相手に伝わるように相手を惹きつける工夫をして伝えている。（慣れ親しみ・発信）
- 友達のスピーチから友達の伝えたいことは何か考えながらいっている。（慣れ親しみ・受信）
- 日本語でも英語でもスピーチでは、はじめと終わりに観客に向けてのあいさつがあることに気付いている。（体験的理解）

これら4つの単元目標に対し、評価規準は次のように設定されている。

- 関心・意欲・態度：相手意識をもって、自分の考えや気持ちを進んで伝えようとしている。
- 慣れ親しみ・発信：伝えたいことが相手に伝わるように、声の大きさや速さだけでなく、表情や動作、具体物などいろいろな方法で工夫して話している。
- 慣れ親しみ・受信：友達のスピーチをきき、大まかな内容を理解している。

体験的理解：日本語でも英語でもスピーチでは、はじめと終わりには観客に向けてのあいさつがあることに気付いている。

しませる」を、話すことを中心とした「発信」と、聞くことを中心とした「受信」に分けているからである。これは学習指導要領と異なる点であり、今後見直す必要があるだろう。

着目すべきは、目標に掲げたことを基本的にはそのまま評価しようとしている点である。

なお、目標と規準の双方に「慣れ親しみ・発信」と「慣れ親しみ・受信」があるのは、日比崎小学校が、小学校外国語活動の目標の三本柱のひとつである「外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親

4. 「単元計画」から見えるもの

計5時間から成る本単元「夢を英語で語ろうーひびっこスピーチコンテストー」の単元計画は次の通り。

単元計画

時	目標と使用表現 (◎が主たる目標で、○はそれに準ずるもの)	評価の観点			評価方法	
		関心・意欲・態度	慣れ親しみ			体験的理解
			発信	受信		
1	◎場面による話し方（スピードや声の大きさなど）の違いに気を付けてきく。（慣れ親しみ・受信） A: I want to be a _____. Because I like _____.			◎	行動観察・ワークシート	
2	◎相手を惹きつけるための工夫（声の調子の変化や具体物の提示）を考えながらきく。（慣れ親しみ・受信） ○日本語でも英語でもスピーチでは、はじめと終わりには観客に向けてのあいさつがあることに気付いている。（体験的理解） A: I want to join（クラブ名）club. Because _____.			◎	○	行動観察・ワークシート
3	◎伝えたいことが相手に伝わるように表情、発音だけでなく、動作や具体物などいろいろな方法で工夫して話している。（慣れ親しみ・発信） ○得意な教科を伝える表現をきいている。（慣れ親しみ・受信） A: I'm good at（教科）. I want to study（教科）hard in junior high school.		◎	○		行動観察・ワークシート
4	◎相手意識をもって、自分の考えや気持ちを進んで伝えようとする。（関心・意欲・態度） ○既習の表現を組み合わせて、伝えたい内容を工夫して話している。（慣れ親しみ・発信） A: Hello, everyone! My name is _____. I want to be a _____. Because I like _____. I'm good at（教科）. I want to study（教科）hard in junior high school. I want to join（クラブ名）club. Because _____. Thank you for listening.	◎		○		行動観察・振り返りカード
5	◎伝えたいことが相手に伝わるように表情、発音だけでなく、動作や具体物などいろいろな方法で工夫して話している。（慣れ親しみ・発信）		◎	○		行動観察・振り返りカード

<p>○友達のスピーチをきき、大まかな内容を理解している。 (慣れ親しみ・受信) A: Hello, everyone! My name is _____. I want to be a _____. Because _____. I want to be like _____. I'm good at (教科) . I want to study (教科) hard in junior high school. I want to join (クラブ名) club. Because _____. Thank you for listening.</p>						
--	--	--	--	--	--	--

2.3. で触れたように、スピーチではあるが、中学校での活動の単なる前倒しではなく、あくまでも、「基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの素地を養う」ための外国語活動としてのスピーチである。よって、使用する表現も、ほとんどがこれまでの外国語活動で既に慣れ親しんできたものである。

また、これも2.3. で触れたことであるが、スピーチにおいては、「声の調子の変化」を利用したり、「具体物の提示」を行ったりすることが効果的であるとの認識が単元計画から読み取れる。

単元計画の「評価の観点」で◎または○が付いている項目を見て気付くのは、単元中での時間が進むにつれ、慣れ親しみの「受信」(聞くこと) から「発信」(話すこと)へと評価すべき点に移っている点である。『小学校学習指導要領解説』には、「音声面の指導については、さまざまな工夫をしながら聞くことの時間を確保し、日本語とは違った外国語の音声リズムなどに

十分慣れさせるとともに、聞き慣れた表現から話すようにさせるなど、児童にとって過度の負担にならないように指導することが大切である」とある(下線筆者)。6年3組外国語活動においても、児童にいきなりスピーチをさせるのではなく、単元の1,2時間目では、ALTの小学生時の夢を聞かせたり、前年度の6年生が行ったスピーチの様子をビデオで視聴させたりすることが活動の中心に据えられている。今後は受信/発信の区別を取り除くとしても、「聞き慣れた表現から話すようにさせる」というスタンスはこれまで通り貫くべきである。

5. 「本時の展開」から見えるもの

筆者が観察した6年3組外国語活動は、計5時間から成る単元の1時間目であった。「本時の展開」は以下の通り。

本時の展開

ACTIVITIES 支援 (○)・評価 (※)		
CHILDREN	HRT	ALT
<p>1 あいさつ Hello, everyone. I'm _____, thank you. And you?</p>	<p>Hello, everyone. ○元気にあいさつをおこない、外国語活動の始まりの雰囲気をつくる。</p>	<p>Hello, everyone. How are you? I'm _____, thank you. ○元気にあいさつをおこない、外国語活動の始まりの雰囲気をつくる。</p>
<p>2 主活動 ① 単元のゴールを知る。 ② 本時のめあてを確認する。</p>	<p>○昨年度の6年生のスピーチビデオを見せ、単元のゴールを示す。</p>	<p>○スピーチビデオを見た後、よかったところを簡単に話す。</p>
<p>スピーチにふさわしい話し方に気を付けてきこう。</p>		

③異なる3つの場面の話し方をきき比べる

○それぞれの場面がイメージしやすいように場面カードを見せながら、活動の説明をする。

【場面を考えながらきこう】

・3つの場面を想定し、どの場面での話し方がきき比べさせる。

“I want to be a teacher. Because I like children.”

- A 友達にこっそり教えてあげる時
- B スピーチでみんなに堂々と話す時
- C 親から反対されて、むきになって言う時

○動作ではなく音声に着目させるために、目を閉じてきかせる。
○どうしてその場面だと思ったか理由を発表させる中で、スピーチにふさわしい話し方（ゆっくり・はっきり・ききやすい声の大きさ）に気付かせる。
※場面による話し方（スピードや声の大きさなど）の違いに気を付けてきいているか。【慣れ親しみ・受信】（行動観察、ワークシート）

○場面によって話し方が異なっていることがよく分かるように話す。

※場面による話し方（スピードや声の大きさなど）の違いに気を付けてきいているか。【慣れ親しみ・受信】（行動観察、ワークシート）

④スピーチにふさわしい話し方をビデオで確認する。

○昨年度の6年生のスピーチビデオを流し、スピーチにふさわしい話し方のポイント（ゆっくり、はっきり、聞きやすい声の大きさで）を確認する。

○スピーチビデオを聞きながらきく。

⑤スピーチの内容をきく。

【内容をきこう】

・ビデオの音声だけをきいて、つきたい職業や中学校で入りたいクラブなど、スピーチの内容をワークシートに書き込む。

○話し方に着目させるために、スピーチビデオの音声だけをきかせる。
○ビデオを止めながらきいた内容を確認させる。そして、話し手が、ゆっくり・はっきり話すことで、内容も理解しやすいことを意識させる。

○きいた内容を確認する時に、答えとなる言葉を言う。

⑥他国の子供が将来つきたい仕事は何かを知る。

○アメリカ合衆国と、HRTが数年間住んだことがあるベトナムを例に、これら2国の子供が将来つきたい仕事をそれぞれ上位3位まで紹介することで、スピーチの内容に対する児童の関心を高める。

○アメリカ合衆国とベトナムの子供が将来つきたい仕事を発音する。

⑦スキットを練習する。		
A: I want to be a _____. (baseball player, soccer player, teacher, nurse, doctor, animator, astronaut, athlete, dancer) Because I like _____.		
3 ふりかえり 4 あいさつ Thank you. See you.	○絵カードを指し示しながら、スピーチにふさわしい話し方のポイントを意識してALTの後について言わせる。 ○本時のねらいが達成できたか相互に評価させ、達成感をもたせる。 That's all for today. Thank you. See you.	○児童が言いにくそうな表現は、繰り返し言う。 ○本時のねらいが達成できていた児童を評価し、みんなに紹介する。 Thank you. See you.

この指導案で「主活動」として取り上げられている①～⑦のそれぞれについて、実際の授業の観察から気付いた点を以下にまとめる。

5.1. 単元目標・本時のめあての提示をめぐる工夫(主活動①と②に関して)

本時は単元の最初の時間である。よって、主活動のはじめに、児童に「単元のゴール」を理解させる目的で、「昨年度の6年生のスピーチビデオを見せ、単元のゴールを示した」のは適切な指導である。

単元全体の目標を示した直後に「本時のめあてを確認」していた点も評価に値する。実際には、「スピーチにふさわしい話し方に気を付けてきこう」という文言をHRTが板書していた。このように単元全体の目標と各時間のそれとを関連付けながら提示することで、児童は各時間で行うことが最終的には何につながるのかをより明確に理解することが出来る。

5.2. 聞かせる工夫・考えさせる工夫(主活動③に関して)

本論第4節の単元計画にある通り、本時の目標は「場面による話し方(スピードや声の大きさなど)の違いに気を付けてきく」(慣れ親しみ・受信)である。この目標の達成に大きく関わるのが、主活動③「異なる3つの場面の話し方をきき比べる」である。

まず、「A 友達にこっそり教えてあげる時」と「B スピーチでみんなに堂々と話す時」と「C 親から反対されて、むきになって言う時」の3場面が設定され、

それぞれを絵で示したものが黒板に貼り付けられた。着目すべきは、これらの絵を見せた後、児童に「目を閉じ」させたことである。目を閉じたまま児童は、ALTが3場面に応じて話し方を変えた“I want to be a teacher. Because I like children.”という表現を聞き分ける活動を行った。こうして音声に集中せざるを得なかった児童は、実際のところ、どの話し方がどの場面に合致しているかをすぐに言い当てることが出来た。

さらに着目すべきは、この活動を単なる「言い当てゲーム」で終わらせなかったことである。どの話し方がどの場面に合致しているかを言い当てた後、児童はなぜそう思ったかを考えるよう指導された。その中で児童は、「スピーチにふさわしい話し方」のポイントとして、「ゆっくり・はっきり・ききやすい声の大きさ」といったものがあることに気付いていった。「実際のコミュニケーションの体験の中で児童に気付かせたり考えさせたりする」(『小学校学習指導要領解説』)活動が実践されていた。

5.3. 本時のめあてを徹底する工夫(主活動④に関して)

前項で触れた通り、主活動③は、異なる3種類の話し方から、スピーチという場に相応しい話し方を児童に選ばせるものであった。これに対し、主活動④はスピーチのみに焦点を絞った活動である。具体的には、主活動①でも使用した昨年度の6年生のスピーチビデオを再度見せながら、本時のめあてに掲げられている

「スピーチにふさわしい話し方」のポイントが何であるかを徹底して理解させていた。

5.4. 次の時間につながる活動（主活動⑤と⑥と⑦に関して）

本時のめあては、あくまでもスピーチにふさわしい話し方を理解することである。主活動⑤と⑥と⑦はこの本時のめあてには合致しない。しかし、これらの活動を敢えて本時に取り入れることで、次時以降の授業進行がよりスムーズになることが期待される。

主活動⑤では、主活動①および④でのスピーチビデオが再度使用された。ただし、主活動④ではスピーチでの話し方に焦点が当てられていたのに対し、主活動⑤ではその内容に焦点が当てられていた。内容を見聞かせる上で三つの工夫が施されていた。1点目は、スピーチビデオの映像は敢えて流さずに、音声のみを聞かせることで、聞かざるを得ない状況にしたこと。2点目は、ビデオを適宜一時停止しながら聞かせたこと。3点目は、下のようなワークシートを配布し、聞いた内容に合致すると思われる項目に○をさせたこと。スピーチビデオを一時停止することなく見ながら、何のヒントもなくその内容を聞こうとすることに比べ、これらの工夫により、聞くことに対する児童の負担は大きく軽減したはずである。実際、ほとんどの児童がワークシートの適切な箇所に○を付けていた。

ワークシート：スピーチの内容をきこう

つきたい職業	サッカー選手	野球選手	医者	ボクサー
がんばりたい教科	国語	算数	理科	社会
入りたいクラブ	剣道	野球	バスケット	テニス

主活動⑥では、アメリカ合衆国とベトナムを例に、「他国の子供が将来つきたい仕事」が上位3位まで紹介された。ここではアメリカの例のみ表にして載せるが、この表を実際に児童が見たわけではない。実際には、ALTが英語で発音した職業名と、それらをHRTが訳したものを聞いただけである。

アメリカの子供がつきたい仕事ランキング

	男子	女子
1位	American football player	doctor
2位	soldier	teacher
3位	basketball player	singer

主活動⑥を通して児童は、国によって人気の仕事異なることを理解するとともに、次時以降に行うスピーチの内容に対する関心をさらに高めたようである。児童の知的好奇心の高まりをうまく活用していた。

主活動⑦は、「夢を英語で語ろう」という単元の最終目標を見据えたものであり、ゆえに話すことを意識したものである。⑥までの主活動は主に聞くことが中心であったが、それは本時が単元の第一時であることを考えると確かに適切であった。しかし、⑥までで聞く活動を十分にしてきた児童に対し、次時以降のことは見据え、本時の最後に話す活動を行わせた点も評価に値する。『小学校学習指導要領解説』にもあるように、6年3組外国語活動では、まさに「聞き慣れた表現から話すようにさせる」工夫が施されていた。

6. まとめ

尾道市立日比崎小学校は、平成17～22年度において、尾道市や文部科学省の研究指定を受けながら先行的に外国語活動に従事してきた。本論では、全面実施となった平成23年度における同校の外国語活動の実践を、ひとつの授業に焦点を絞って分析した。評価すべき点をまとめたい。

- (1) 小学校における全教育課程の中に位置付けられ、他教科等とも結び付けられている。
- (2) 指導事項を通じて、中学校との連携を意識したものになっている。
- (3) 単元全体の目標、各時間の目標、評価を有機的に関連付け、かつ児童に明示している。
- (4) 聞かざるを得ない場面がうまく設定されており、また聞くことに対する児童の負担が過度にならないような工夫も施されている。
- (5) 教師が答えを先に言うのではなく、児童がそれを考え出すような活動が組み込まれている。
- (6) 児童の知的好奇心をうまく高めている。
- (7) 聞き慣れた表現から話すようにさせている。

最後に、今後の課題と思われる点を指摘しておく。第3節で触れたように、日比崎小学校は、小学校外国語活動の目標の三本柱のひとつである「外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」を、話すことを中心とした「発信」と、聞くことを中心とした「受信」に分けている。本論の分析対象である6年3組外国語活動では感じなかったことではあるが、筆者が平成23年度に観察した他の授業では、発信と受信の区分けゆえに、活動がやや窮屈になっている

と感じることがあった。教師によっては、「この時間の目標は受信なので、発信を活動に入れてはならない」と誤解していたようである。また、「慣れ親しみ」に関わる目標を発信と受信に分けると、基本的には評価も別々に行うことになり、教師・児童の負担の増加も懸念される。以上のような誤解や負担増を避けるためにも、また学習指導要領の文言に合わせるためにも、今後は受信・発信の区分けを無くした方がよいと判断する。

受信・発信の区分けを無くすことに加えて、目標と評価規準をより抜本的に見直す必要もあると考える。昨年度発行の本紀要において筆者は、日比崎小学校が目指す「豊かなコミュニケーション能力を身に付けた子ども像」を紹介し、その子ども像に合致した児童を育成するために同校が6年一貫の目標と評価規準を外国語活動に関し設定していることに触れた。6年一貫の目標と評価規準を設定しているのは、日比崎小学校が平成23年度からの全面実施前から外国語活動に取り組んで来たからである。同校は現在もモジュールの方式で低・中学年を対象に外国語活動を実施している。しかし、活動にかかる時間が減少したことは事実であ

り、それにとまって目標と評価規準も見直すべきである。また、目標および評価規準の項目が多すぎるとも感じている。たとえば、「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」という目標に対し、低学年を対象としたものだけで6種類のより細かな目標と評価規準を設定している。もっと簡にして要を得た目標および評価規準の設定が望まれる。

【引用文献】

- 小野 章 (2011) 「研究指定校における外国語活動への取り組み—尾道市立日比崎小学校の場合—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）』第60号, 145-152.
- 尾道市立日比崎小学校 (2012) 「平成23年度 尾道市立日比崎小・中学校教育研究会要項」
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』 東洋館出版社.
- 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説外国語編』 開隆堂出版.